第 23 回研修会事例報告①

大東文化大学の初年次教育
― 東松山キャンパスでの取り組み ―

大東文化大学副学長　押川 典昭氏

1. 初年次教育について

報告テーマは「大東文化大学の初年次教育」というものですが、初年次教育についてはみなさんも概略はご存じでしょう。近年とくに注目されるようになったプログラムで、2008 年 12 月の中教審答申「学士課程教育の構築に向けて」は、初年次教育を高等学校から大学への円滑な移行を図るための教育と位置づけ、積極的な取り組みを求めています。また、同年 3 月には全国の大学教員による「初年次教育学会」が設立され、活発な活動を行なっています。

初年次教育が要請されるようになった背景には、今日の大学が抱える問題があります。第一に、入学してくる学生たちの多様化。だれもが大学教育にアクセスできるユニーバーサル段階にあって、学力や勉学意欲、動機、学習習慣などで著しい多様化（格差）が進行していることです。そして第二に、その結果、学習や学生生活、対人関係などで不適応を起こす学生たちが増えていることです。

本学でも、学生相談室の報告から、同じような傾向が読み取れます。以下は東松山学生相談室の年次報告書からおもな相談内容を抜粋したのですが、例えば、対人関係の悩みでは、友人のつくり方、良好な関係の保ち方がわからない、勉学では、授業についていけない、授業が面白くない、学習意欲がわかない、学科が合わず転科したい、また、授業とサークル活動、アルバイトの時間管理がうまくできない、といったさまざまな悩みや不安が報告されています。

準備学習についても、2009 年度後期に実施した「1 年生の生活と学習状況に関するアンケート」から、自習や読書の時間が大幅に不足していることがわかる。これは本学だけでなく、多くの大学が直面している問題でしょう。

2. 教室内での取り組み

このように勉学と精神の面でさまざまな不安や悩み、問題を抱える学生たちを大学という場になじませ、大学教育に導いていくのが初年次教育の課題なのですが、東松山キャンパスではどんな取り組みをしているのか。カリキュラムの内と外から 4 つ紹介します。

カリキュラムでは、法律学科の 1 年次必修科目「現代社会と法」のような授業があります。法学は体系的な学問で基礎からの積み重ねが大事ですから、この授業では徹底した反復と自習による確認作業を求めています。本学の教員が共同執筆した教科書を使って講義した後で、毎時間の小テストで理解度の確認を行なうのですが、小テストで間違ったところを 1 回目は赤、2 回目は青、3 回目は緑色のペンで学生自身が直すことが義務づけられている。そうやって学習の習慣化を図ろうというわけです。

国際関係学部では、1 年の基礎ゼミ用に手作りで編集した共通教科書『チュートリアル』が使われています。これは国際関係学部が教育研究の柱に据えているアジア地域のトピックを中心に、講義の聴き方、ノートの取り方、本の読み方、資料の探し方、インターネットの利用法、レポートの書き方など、「大学での学び方を学ぶ」ためにワークブック形式にまとめたテキストで、アカデミック・スキルの習得に主眼をおいたものです。

3. 教室外での実践的な取り組み

これらが教室内での座学だとすれば、「東松山キャンパス朝ごはんプロジェクト」は、課外での実践的なプログラムです。この取り組みは、学生たちが規則正しい食生活を確立し、心身とも健康な姿で授業に臨むように、生協食堂部と提携し、低価格でバランスのとれた朝食を提供しようという趣旨で始めたものです。毎朝、最初のスクールバスが到着する 8 時 10 分から 9 時半まで、300 円のセットメニューを提供し、そのうち 100 円を大学が補助しています。食育のための全学共通科目「栄養学」と併せて、2010 年 4 月から始めたプログラムで、1 日 100 食限定ですが、2011 年度後期は 1 日の利用者が 100 人を超える日もめずらしくなくなり、来年度からは毎朝 150 食に増やす予定です。

もうひとつは、今年度から始めた「ライティング・カフェ」です。文章作成を支援する大がかりなライティング･センターを設置している大学は相当数ありますが、本学では、6 人の教員のボランタリーな協力を得ながら、図書館の一角で小規模に始めました。「カフェ」とした所以ですが、月～金の 11 時～ 13 時、13 時～ 15 時の 2 つの時間帯に、前期は 48 日間で累計 72 人の学生が相談に訪れています。相談内容は卒論、レポートの作成法、就職活動のための日本語力アップ、奨学金留学の応募書類の書き方、スピーチコンテストのドラフトの書き方など多岐にわたり、1 人につき 30 分から 1 時間かけて対応しました。

本学は今「教育の大東」を掲げています。その実現のためには大きな設計図を描くこともちろん必要ですが、こんな地道な取り組みの積み重ねが「教育の大東」を支えていくのだと思います。

4. 図書館への期待

大学図書館の機能が「閲覧」から「学習支援」へ移行しつつあるのはしばしば指摘されることですが、主として 1、2 年生の学ぶこの東松山キャンパスではその必要性は一層高い。東松山図書館の学生の年間入館者数は、2010 年度で約 30 万人、開館日 1 日当たり 1,150 人です。もちろ

ん閲覧や勉学以外の目的で入館している学生もいるでしょうが、ほとんどはなんらかの知的関心をもって図書館にやってくる。この大きな資源を東松山キャンパスの教育に、とくに学習支援の場として活用したい。それがラーニング・コモンズのようなかたちになるのか、別のものになるのかはこれからの研究課題ですが、「教育の大東」を支える大きな柱になってほしい、それが図書館に対する私の期待です。